

源氏物語爪印 手習巻

村 井 利 彦

- 【1】「横川に、なにがし僧都」がいる。という冒頭。ここのところの源氏物語の、先祖返りの文脈からして、これは、若紫巻で活躍した北山の某僧都を意識した設定であろうかと思われる。もしそうなら、源氏物語の巨大なフレームの完成を作者はもくろんでいるということになる。折しも、若紫と同じく春の終わりという設定も、このあたりの事情と密接にからんでいると考えられる。
- 【2】しかし、「横川」「僧都」「八十あまりの母」「五十ばかりの妹」そして、「古き願」「初瀬」「奈良坂」「山籠りの本意深く」などの立言は、古来そう読まれてきたように、この僧都には、恵心僧都源信のイメージが強烈に与えられているように思われる。年齢が具体的に記されている点も注目すべきポイントである。源信の生没年時は、942～1017。紫式部とはほぼ同時代人である。源氏物語の初期、紀貫之や伊勢の名を出して時代設定を暗示した手法を久し振りに採用している。今回は、源氏物語の今は現代なのだというサインである。現代まで物語ってきたらもう語れない。話がこれから先どうなるか誰にも分からないのだから。そうでしょう、皆さん。とやれば、作者はどこで書くのを止めてもよいという理屈になる。これは、結末のフリーハンドを作者がいま持っているという宣言である。紫式部の悪戯っぽい目が想像されるところだ。
- 【3】が、作者が恵心僧都そのままをなぞって記している訳ではない。母をすでに手許に引き取っているように書いてあるが、母は奈良の実家で死んだはずである。このズレは、当時の読者には、相当強く意識されたものと思われる。源信のようで、源信ではない。これは、かつての帚木の手法として了解したほうがよいのかもしれない。あるいは、われわれが知っている説話そのものが間違っているのかもしれないのだけれども。
- 【4】「古き願」(173)とは、どういう願なのだろうか。八十歳の老婆が、わざわざ比叡山の麓から初瀬にまで出かけている。尋常の沙汰ではない。生涯かけた願であったにちがいない。

- 【5】それにしても、初瀬詣での帰りの一行に浮舟が救い取られるという構想は、浮舟本人の初瀬信心との関連を思うと、運命的である。 東屋巻【59】
- 【6】僧都一行が移転した「宇治の院」という「いといたく荒れて、恐ろしげなる」「公所」(174)は、夕顔巻の某院を意識した設定であろう。あそこで夕顔は死んだ。ここで浮舟は蘇る。
- 【7】八宮の別荘は架空のものとしても、この宇治院は、当時荒れ果てていても現実に存在し、自由に旅人の休憩に供されていたものと思われる。奈良に旅をした経験のある人にとっては、馴染みの施設であったに違いない。平等院側ではないはずだから、宇治神社のあたりにあったものと想像される。
- 【8】白い装束をひろげ、巨木の下で泣いている髪長い女。白と黒のコントラストが鮮やかである。場所が場所だから「狐の変化」(175)と弟子の僧たちが考えたのは不思議でない。報告をうけた僧都が「狐の人に変化するは昔より聞けど、まだ見ぬものなり」(176)と言ってやって来るというのは、源信らしいかどうか。物見高い野次馬めいた性格設定である。「真言を読み、印をつく」って正体暴露を試みるが、まもなく「これは人なり。さらに非常のけしからぬものにもあらず」と断言するところ、軽い印象だが、「天の下の験者」(177)の、ただならぬ法力の一端を示している。僧都の人間の魅力は充分で、北山僧都のような寄りつきがたい人物ではない。
- 【9】「疾く夜も明け果てなむ」(176)とある。時間設定は、浮舟が失踪した夜の、暁方ということになる。
- 【10】「ありつる宿守の男を呼ぶ。山彦の答ふるも、いと恐ろし」(176)。ますます夕顔巻だ。【6】。
- 【11】お化け「のっぺらぼう」は、源氏物語時代からあるという証明(177)。
- 【12】「その命絶えぬを見る見る捨てむこと、いみじきことなり」(178)と言い、弟子たちに非常に具体的で分かりやすく説明する僧都。「穢らひ」とか「ものにけどられ」たのだとか、俗信から出ない弟子たちと比較すれば、彼の日頃の、とらわれない融通無碍の宗教活動の一端がはからずも露呈している。きっと人気のある人物であろうと推測される。
- 【13】僧都の年齢。「六十にあまる年」(179)。源信だとすれば、1005年前後ということになる。まさに紫式部が源氏物語を書いている瞬間ではないか。これは、作者の意識的操作であろう。【2】
- 【14】浮舟のいでたち。「白き綾の衣一かさね、紅の袴ぞ着たる」(180)。コントラストは、白・黒・赤、となる。【8】。
- 【15】妹尼は、長谷寺で夢をみている。浮舟を見て「ただ、わが恋ひ悲しむ娘の、帰りおはしたるなめり」(180)と確信犯的行動をとるのは自然であろう。妹尼も、僧都の弟子たちのレベルの人である。ところで実際の妹尼・願西は、『続本朝住

生伝』によれば、才学道心ともに兄・源信を越え、生涯独身の人であった。もともと、『選集抄』によれば、夫に先立たれて出家したことになっている。『本朝法華験記』に、没年は、寛弘年中（1004～1012）とある。願西が死んだころ、紫式部は、この部分を執筆していたものと思われる。 【13】。

【16】浮舟の言葉「生き出でたりとも、あやしき不用の人なり。人に見せて、夜の川に落とし入れたまひてよ」（182）より、彼女が川に身を投げようとしたが、未遂に終わったことが判明する。

【17】僧都一行は、宇治に二日間滞在している。「そのわたりの下衆」（182）の情報から、薫が通っていた八宮の娘が急死して、葬儀があったことが知らされる。で、浮舟は、人々に「さやうの人の魂を、鬼の取りもて来たるにや」（182～3）と解釈されて、納得されてしまう。浮舟は、浮舟の魂を入れた浮舟となったのである。この操作に意味があるや否や。

【18】「比叡坂本」の「小野」へ舞台が移る。比叡山の麓ということは仏のいる世界のすぐ近くというイメージであろう。悲劇の舞台であった宇治から、救済の地・小野への移行と捉えることができよう。

【19】しかし、小野の地は、源氏物語において初めての地ではない。夕霧巻、一条御息所が非業の死を遂げた場所である。だから、完全に救済イメージばかりとはいえない。所変われど宇治と同じ所となる可能性がないわけではない。

【20】妹尼たちの浮舟解釈。「物詣などしたりけむ人の、こちなどわづらひけむを、継母などやうの人の、たばかりて置かせたるにや」（184）。当時の継母物語は、かくばかり残酷なものであったとみえる。

【21】それから二ヵ月経過する。妹尼の僧都に宛てた手紙の文面から判断して、その間ずっと浮舟は、発見時と同じ状態であったものと思われる。

【22】「あが仏、京に出でたまはばこそあらめ」（185）は、この巻冒頭の「山籠りの本意深く、今年は出でじ」に対応する。世俗に染まることを厳しく拒む。よく知られた源信僧都の印象、である。

【23】浮舟の美貌は僧都も認めるところ。「功德の報いにこそ、かかる容貌にも生ひ出でたまひけめ」（186）。前世で余程の善根をつまなければ、このような美貌の人には生まれてこれない。こういう発想で、僧都の浮舟救済は、意味を持たせられる。

【24】妹尼の「初瀬の観音の賜へる人」（186）という確信を僧都は、「種なきことはいかでか」と一蹴し、宇治で行方不明になった人であるという認識を示している。俗信のレベルにある妹尼と、とらわれぬ境地にある僧都との差は、相当にある。妹尼のモデルと思われる、源信の妹・願西は、才学道心ともに兄を越える人であった。 【15】。このあたりの「歴史ばなれ」はかなりのもので、あるいは、紫式部が源信ファミリーのパロディを狙っているのかとさえ考えたいくなるほどで

ある。

- 【25】僧都の言葉。「いであなかま、大徳たち。われ無慚の法師にて、忌むことのなかに、破る戒は多からめど、女の筋につけて、まだそしりとらず、あやまつことなし。齡六十にあまりて、今さらに人のもどき負はむは、さるべきにこそあらめ」(187)は、率直で人間的魅力を感じさせるものである。「ものの聞こえ」とか「仏法の瑕」とかいう発想など超越している。僧都は、浮舟の美貌の意味を重視し、彼女の善根のために祈っただけにすぎない。【23】。
- 【26】僧都の年齢へのこだわり。「齡六十にあまりて」は、どうあっても源信、どうあっても現代、という作者のこだわりであろう。【2】。
- 【27】僧都によって調伏されて、浮舟から飛び出た物怪の台詞は、興味深い。身分の高い人。法師。恨みをのこした死。宇治八宮邸に住みついて、大君を取り殺す。『河海抄』は、モデルとして紀真済をあげる。鋭い指摘だと思う。彼は、惟喬親王のために祈り、事破れて天狗となり染殿の後・藤原明子にとりついた。もしかすると紫式部は、喜撰法師のことを紀真済と考えていたのではあるまいか。時代的にもこの比定は不自然ではない。喜撰は、実は「紀氏の仙人」なのだ、と考えていたのではないか。紀真済について、もうすこし調査する必要がある。
- 【28】浮舟の身は、初瀬の観音が守護していたことが確認される。浮舟の初瀬信仰については東屋巻【59】を参照すればよい。
- 【29】物怪が抜けてからが、浮舟の第二の人生の開始である。「知らぬ国に來にけるこちして、いと悲し」(188)。
- 【30】浮舟は、自分の過去の記憶を全て回復したわけではない。「住みけむ所、誰と言ひし人とだに、たしかにはかばかしくもおぼえず」(188)という状況は、かなり重い記憶喪失である。縞性記憶喪失か。
- 【31】浮舟の記憶は、失踪時に関するのみ具体的である。「簀子の端に足をさしおろしながら」(189)。激しい風。荒れ狂う宇治川の音。
- 【32】「いときよげなる男の寄り来て、「いざたまへ、おのがもとへ」と言ひて、抱くこちのせし」(189)。浮舟は、この男を匂宮だと思ったのだが、この男こそ物怪であったのである。紀真済は、美男子であったのではないか。
- 【33】浮舟仮の出家。「ただ頂ばかりをそぎ、五戒ばかり」(190)を僧都から受けたのである。本格的出家への第一歩というところ。
- 【34】浮舟の性格。「もとよりおれおれしき人の心」(191)。
- 【35】浮舟が身を置いているところは、「一年たらぬつくも髪」ばかりの老女集団の中である。その中であって、彼女は「いみじき天人の天降れるを見たらむやう」(191)であったとある。はきだめに鶴の印象である。こんなところでは、かえって目立つ結果となろう。
- 【36】妹尼が「かくや姫を見つたりけむ竹取の翁よりも、めづらしきこちする」

(192) とあるのは、天人の連想からでた自然な発想であろう。が、かぐや姫と浮舟のイメージをつつつけたことで、近い将来、浮舟がここを出て泣き泣き都に帰ってゆく場面は自ずから醸成されるということに注意したい。

【37】妹尼の履歴(192)。上達部の北方。夫と一人娘に先立たれて、出家。小野に住み始める。『選集抄』のタッチで書かれている。【15】。もっとも、『選集抄』が『源氏物語』の影響を受けたというのが実際であろうけれども。

【38】妹尼の履歴を知ると、若紫巻の妹尼のことが連想されよう。孫の紫上がいなだけの違いである。このあたり、作者の意識的操作であると思われる。源氏物語のフレーム作り。

【39】浮舟は、ここで二重の形代になる。初めに大君。ここで妹尼の娘である。二重になって、ますます浮舟は独自性を希薄にされる。帚木の技法であると考えられる。

【40】小野の環境は、宇治のような厳しさとはちがっている。こころなごむところである。浮舟にとっては「見し東路のことなど思ひ出でられて」(193) 故郷感覚のする場所であつたらしい。ここで、浮舟が『更級日記』の作者のように、東国経験を持つ女であることが確認される。彼女の記憶だが、すくなくとも少女期の記憶は回復していることも確認されるところである。

【41】「かの夕霧の御息所」という言い方は面白い。夕霧は夕霧巻のことで、これで、源氏物語の巻名は、作者自らが付けたものであることが判明する。また、場所を小野に設定したことは、夕霧巻との繋がりを考慮した結果でもあることが推測される。この点は、もっと重要視してしかるべきことだと思われる。

【42】琴(きん)を弾く妹尼。古代なる人である。北山僧都も琴を弾いていたことが思い出されよう。

【43】手習巻、巻名の出所(194)。

【44】浮舟が思い出す人々。母、乳母、右近。薫と匂宮がないことに注意したい。彼女は、身内に帰っているのである。このあたりで、彼女の記憶は完全に回復していると見てよいか。

【45】中将の登場。妹尼の娘婿。やってきた中将を見て、浮舟は「恐びやかにておはせし人」つまり薫の「御さまけはひ」を「さやかに思ひ出」(196) している。これは、中将でもって、作者が薫を書こうとしていることの端的な表示である。これも、帚木の筆法である。

【46】中将の年齢設定「二十七八」。これも、完全に薫の現在年齢を意識した操作である。

【47】中将の「心のうちあはれに、過ぎにし方のことども、思ひたまへられぬをりなき」という心理、「昔をおぼし忘れぬ御心ばへ」、さらには「世に靡かせたまはざりける」(197) 性格。薫そのままではないか。

- 【48】「御前なる人々」が言う。「故姫君のおはしまいたるこちのみしはべるに、中将殿をさへ見たてまつれば、いとあはれにこそ。同じくは、昔のさまにておはしまさばや。いとよき御あはひならむかし」(199)。状況設定は、薫対浮舟のエピゴーネンでなくてなにか。浮舟は、昔大君今妹尼の娘といったごとく二重の形代。形代も二重になれば、本物であろう。【39】。作者はおそらく、この巻の、中将対浮舟でもって、本筋の薫対浮舟の行方を暗示しようとしているのではないか。これは、空蟬で藤壺をそうした帚木の筆法である。
- 【49】浮舟の決意。「さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなむ」(199)。はたして、彼女がこれを貫けるか。
- 【50】風のいたずらで、浮舟の後ろ姿を見た中将。いよいよドラマの開始である。少将は、すでに浮舟のあらましを中将に語っている。昔を今にという女房たちの心を思うと、浮舟の立場は非常に不安である。朝顔の状況にやや似ている。浮舟は朝顔になれるかという問題もここに発生する。
- 【51】中将は、今の結婚生活に満足していない。「親の殿がちになむ」(201)というの、昔の光源氏ようである。その思いの対象が生きてはいないという一点で、薫に比定される。このあたり、廻行現象が著しい。昔はよかった、昔に帰りたい。読者の意識を昔に廻らせる。未来を閉ざしてしまう。源氏物語を完結し小宇宙化する狙いであろう。
- 【52】浮舟の思い。「よろづのこと夢のやうにたどられて、あらぬ世に生れたる人は、かかるこちやすらむ、とおぼえはべれ」(201~2)。しかし、ここ小野の地も、現実からの地続きで、けっして彼岸ではない。彼岸の地・比叡山のすぐ側ではあるけれども。
- 【53】中将が、横川に行き、見た浮舟の話をする(202)。この場面、薫がそうする未来の先取りであろう。北山僧都に、同じようなことをした若紫巻における光源氏のイメージの喚起。これも作者の目指したところかもしれない。
- 【54】浮舟が、かかる山里にいることを、中将は「昔物語のこちもするかな」(203)と批評している。夕顔・若紫・末摘花感覚であろう。
- 【55】浮舟のことを聞く中将の問いに、簡単に応じる妹尼も、昔を今にの感覚であろう。妹尼もまた、浮舟は娘の生まれ変わり、昔のように中将を通わしてみたいと思っているのである。出家生活者としていかなものか。願西がモデルとはとても思えぬ設定である。
- 【56】八月十余日。冒頭が三月末であるから、あれから相当に日々が経過していることになる。この前におかれた女郎花の贈答は、初秋のものと考えられるから、中将は約一箇月後に再び小野を訪れたことになる。
- 【57】中将の言葉。「何ごとにも心かなはぬこちのみしはべれば、山住みもしはべらまほしき心ありながら、ゆるいたまふまじき人々に思ひ障りてなむ過ぐしは

べる」(205)は、完全に薫のエピゴーネンであろう。薫の先取り。中将を書いておけば、もはや薫のことは書かなくてよいという技巧である。帚木の筆法。

【58】浮舟の出家意識の危うさについての妹尼の批評「世をこめたる盛りにては、つひにいかが」(206)は、浮舟の未来への不安を常識のレベルで述べたものである。

【59】浮舟に変わって恋の贈答をする妹尼。こういうことは、昔とったきねずかで、お手のものであったと見える。「尼君は、はやうは今めきたる人にぞありける」(207)。彼女の若い頃は、流行の先端をゆく人であったということだ。これでは、とても願西にはなれまい。

【60】浮舟のいる環境は、出家者の環境としてふさわしいものか。むしろ逆で、非常に世俗的であることを作者は、面白おかしく語っているように思われる。「古代の心どもにはありつかず、今めきつつ、腰折れ歌好まじげに、若やぐけしき」(208)。浮舟は、老いた彼女たちの見た夢か見果てぬ夢かの代行者なのである。

【61】大尼君の出現でもって、浮舟のいる環境は俗悪の様相を呈する。ちょっとこれでは收拾がつきそうにない。それにしても、源信の母はこういう人では断然ないはずである。こうなると、この巻と次の最終巻は源信をパロっているとしか考えられないがどうだろうか。

【62】中将の、大尼君に対する印象。「いかなる所に、かかる人、いかでもりゐたらむ、さだめなき世ぞ」(210)。大尼君は前時代の遺物、化石的存在なのである。

【63】大尼君が、妹尼に琴(きん)を勧める。琴の現状についての解説がある。「今様は、をさをさなべての人の、今は好まずなりゆくものなれば」(210)。琴は、光源氏が愛し、こだわった楽器であった。この楽器の古さが、光源氏の時代の古さ、遠さなのである。この琴(きん)を弾く妹尼は光源氏時代の名残の人という位置づけであろう。

【64】大尼君は、昔「あづま琴」の名手であったという。相当に古く、田舎くさい感じがする。大尼君が「あづま琴」で、その娘である妹尼が琴(きん)ということとは、妹尼は、結婚して光源氏の世界に接近したということであろうか。

【65】大尼君の弾く調子をとる言葉「たけふちりちり、たりな」(211)は珍しい。チントンジャンといった感覚か。

【66】浮舟の現状を大尼君が解説する。「容貌はいときよらにものしたまふれど、もはら、かかるあだわざなどしたまはず、埋れてなむものしたまふる」(212)。率直で正直な説明である。

【67】大尼君の演奏で座は白けて解散ということになる。この大尼君のものぐるおしさも、源信の賢母のイメージとはかなりかけ離れている。パロディであろう。

【61】。

- 【68】「人の心はあながちなるものなりけり、と見知りにしをりをりも、やうやう思ひ出づるままに」(213)とあるところからすると、浮舟の記憶喪失もこのあたりで治癒しているものと思われる。そして、出家を願うという展開であるから、もう男と女の関係から脱出する決意を固めていることが分かる。中将の成算は期待できない。
- 【69】九月。妹尼の初瀬詣で。初瀬観音の靈驗を信じて同行を勧める妹尼と、自分の経験から「かひな」しとする浮舟の心との対照が面白い。
- 【70】浮舟を「物懼はさもしたまふ人」と思う妹尼。夕顔のイメージである。
- 【71】浮舟の歌に詠まれた「二本の杉」(215)に着目した妹尼が「二本は、またもあひきこえむと思ひたまふ人あるべし」と言ったのは凶星であったようで、浮舟は「胸つぶれて、面赤め」ている。彼女の記憶が完全に戻っている証拠であろう。さても、彼女の心の底にあるこの人とは誰のことか。匂宮か薫か。 【68】
- 【72】碁を打つ場面(216)。竹河巻以来である。しかし、ここは空蟬巻の方を意識しているのではないか。源氏物語のフレーム作り。
- 【73】浮舟が碁が強いという設定は意外である。僧都も妹尼も強いらしい。頭のよい人という印象づくりのためか。「筆取る道と碁打つこととぞ、あやしう魂のほど見ゆる」とかって作者は書いた。 絵合巻【51】。とすれば、これまで、田舎者、不教養という浮舟のイメージの転換を、作者はここで狙っているのだと解釈したい。
- 【74】少将は、浮舟を批評して「玉に瑕あらむこちしはべれ」(217)と言った。浮舟を「瑕ついた玉」とらえなおすのも面白い。
- 【75】妹尼が初瀬に出掛けた留守中に中将がやって来る。しかも夜。浮舟は、防波堤を失った舟のような立場で、歌を初めて贈らざるを得ぬ仕儀となる。この歌、ますます中将の気をひく結果となって、浮舟は追い詰められる。宇治の状況が小野のものとなる。逃げた世界が、大尼君のところ。そこが、鬼の住処もかくやという世界。夕顔の運命が彼女を襲うという展開である。
- 【76】大尼君とその仲間の尼の「えもいはずおどろおどろしきいびき」(219)の二重奏。「今宵この人々に食はれなむ」と浮舟は思ったとある。相当の軒であったとみえる。つれて来た「こもき」が色気づいて、中将の供をしてやって来た、ほどほどの恋の相手のところに行ってしまう、なかなか帰ってこないというの、なにがし院の惟光めいている。
- 【77】鼯の例え。額に手をあてて執念深かそうに見る有り様。大尼君はかなり惚けがすすんでいるものとみえる(220)。
- 【78】浮舟の回想のなかで、東国暮らしを確認できる。「はるかなる東をかへるがへる年月をゆきて」(221)。 【40】。
- 【79】匂宮から薫への回帰。浮舟の心境(221~2)は確実に変化している。

- 【80】法師たちがやってきて、僧都が山を下り、宮中に出向くという報せをする。ここで急に現実社会に立ち戻る印象が強い。浮舟の記憶が完全に戻った後だけに、タイミングは絶妙である。いよいよ浮舟に現実が押し寄せる。
- 【81】それにしても、「一品の宮」つまり女一宮がものけに悩んでいるので、「山の座主」が「御修法」を行ったのだが、効かず、こうなったら僧都に頼む以外ないという仕儀になった。ということは、この僧都の法力が天下第一であるという証明であろう。とすれば、その法力無双の僧都が浮舟を救えるかという問題が、源氏物語の最後の問題だということになる。
- 【82】浮舟の髪の毛の長さ、六尺。
- 【83】出家に際して、浮舟の心にあったもの。「親に今一度かうながらのさまを見えずな」(223) ってしまったこと。僧正遍昭の歌「たらちねはかかれとてしもむばたまのわが黒髪を撫でずやありけむ」の一節を引用するのは自然であろう。
- 【84】僧都に出家を願い出た浮舟は、願望達成のため小さな嘘をついている。私はまもなく死ぬような気がする。たとえ生きていても普通の状態では生きられない。幼い頃より苦勞の連続で、親も私を尼にしたいと思っていた。せめて、後の世だけでも、安楽に生きたいと心の底より思っている。とくに、母の意思の部分は事実と遠い。おそらく僧都の心を動かしたのは、この部分であったろう。
- 【85】僧都が決心したのは、「あしきものけの見つけそめたるに、いと恐ろしくあやふきことなり」(226) という点である。悪霊から浮舟を守ってやる、それが出家であった。弟子の阿闍梨もそのように考えている(227)。
- 【86】髪を切る具体的な描写は興味深い。「几帳の帷のほころびより、御髪をかき出だしたまへる」(227)。現場を作者は見えて知っていたにちがいない。髪を切った阿闍梨が、「のどやかに、尼君たちしてなほさせたまへ」というのも、妙にリアルである。
- 【87】「うれしくもしつるかな」(229)。この、出家、考えてみれば、浮舟がうまれてこのかた行った最初の決断であったように思われる。自分の人生を自分で決定した初めての瞬間である。
- 【88】「残り多かる御世の末を、いかにせさせたまはむとするぞ」(229) という周辺の心配は当然のこと。どこで、この疑問に対する解答のサインを作者は出すのであろうか。
- 【89】「手習」をする浮舟。「なつかしくことはる人さへなければ、硯に向かひて」(230) とあることから理解されるように、手習は、浮舟孤独の象徴的行為と位置づけられよう。これが、巻名となっていることに注意したい。
- 【90】「なきものに身をも人をも思ひつつ捨ててし世をぞさらに捨てつる」(230)。二重の出家。なみなみならぬ決意の表明である。同趣旨の歌がもう一つ続いていることでこのことは自明であろう。

- 【91】中將からの文に、初めて返歌した浮舟の心理はどう解釈すべきか。出家後の晴れ晴れしきからくる油断か。内容は、謙讓表現であろうけれども、男心をそそるような不安定なものである。これも手習。自分の気持ちを素直に表現したまでのことであろうけれど。
- 【92】帰ってきた妹尼の嘆きは当然である。彼女は、初瀬で浮舟のために祈ったのだから、浮舟の行為は、妹尼の初瀬参詣を台無しにしてしまったことになる。
- 【93】女一宮の病気は、僧都の祈りで直った。世間が僧都を「いよいよと尊きものに言ひののしる」ところとなった。法力天下第一の証明である。 【8】 【81】
- 【94】僧都が夜居の僧をつとめる (233)。薄雲巻のことが思い出されよう。なにか秘密が吐露される期待が高まる。
- 【95】「人住まで年経ぬる大きなる所は、よからぬものからず通ひ住」(234) という原則。融の河原院、夕顔の某院、そしてこの宇治院。
- 【96】僧都と明石中宮とがいる場に、薫の愛人「宰相の君」がたまたまいるという設定も運命的である。匂宮の勢力圏に、薫の情報源が延びていて、そこのみが反応するという構図である。偶然の面白さ。
- 【97】妹尼の夫は「衛門の督」であった (235)。柏木と同時代の柏木である。しかし、作者が期待するイメージは、柏木ではなく、空蟬の父のほうかもしれない。先祖返りの文脈。フレーム作り。
- 【98】田舎者のなかにも美人はいる。龍のなかから仏が生まれたではないか。こういう僧都の言葉、なかなか洒脱である。とれられない魅力の持ち主であったと想像される。
- 【99】美人は罪の軽い人なのだという発想 (235)。この伝でゆけば、末摘花などそうとう前世で罪を犯していることになる。
- 【100】中宮も小宰相も、僧都の話の内容の意味するところをおぼろに把握している。しかし、確認できないから、薫に知らせることを思いとどまっているだけである (235~6)。
- 【101】僧都の浮舟に対する教訓 (236~7)。「今はただ御行ひをしまへ。老いたる若き、定めなき世なり」「常の世に生ひ出でて、世間の榮華に願ひまつはるる限りなむ、所狭く捨てがたく、われも人もおぼすべかめる」。と言って、白氏文集「陵園妾」を引用する。「このあらむ命は、葉の薄きがごとし」「松門に暁に到りて月徘徊す」。この「陵園妾」の引用は、どういう意味があるのであろうか。この詩の内容は、美女が墓守となって空しく老いてゆくイメージである。作者は、浮舟の未来の暗示効果を考えているのであろうか。だとすれば、浮舟は、誰の墓を守るのか。光源氏の墓か。源氏物語の墓守、といった役どころが実は浮舟なのだよ、と作者が暗に言っていると解釈すべきか。この「陵園妾」が、美人になんか逢わない方がいいのだよという結部をもつ「李夫人」の後に置かれた諷諭詩で

あることも興味深い。気の毒な運命の人々を語る巻々。救いの期待できない悲劇の群像、といったイメージでこのあたりを覆ってしまおうという作者の魂胆を感じないか。

【0102】「思ふやうにも言ひ聞かせたまふかな」(237)と浮舟は思う。今のところ、彼女にとって僧都のみが唯一の理解者である。

【0103】小野の具体的位置であるけれども、「山へ上る人なりとても、こなたの道には、通ふ人もいとたまさかなり。黒谷とかいふ方よりありく法師の跡のみ、まれまれは見ゆるを」(238)など参考になるか。秋元のあたりか、戸寺のあたりか。大原までゆくと、山に上る途中に立ち寄るということは不自然。あるいはずっと手前の、八瀬遊園のあたりか。調査する必要がある。

【0104】中將がやって来て、浮舟を垣間見る。小柴垣ではなく「障子のかけがねのもとにあきたる穴」から見るというのがリアルである。北山の間というより空蟬、夕霧、椎本の感覚である。

【0105】少將の尼が、中將に浮舟を見せたのは、浮舟があまりに美しかったからである。彼女も、未練の女。出家者には遠い。浮舟の危うい環境の提示であろう。この環境で、道心深いのは浮舟のみとってよいのではないか。

【0106】「尼なりとも、かかるさましたらむ人はうたてもおぼえじ、など、なかなか見所まさりて、心苦しかるべきを、忍びたるさまに、なほかたらひとりてむ」(240)という中將の思は、真相を知った後の薫の心理の先取りであろう。この危うい環境で、浮舟は自己の意思を貫けるのか。

【0107】自分の亡き後、浮舟の世話を頼むという趣旨の発言をする妹尼は、薫を信じきって後事を託した八宮に似ている。浮舟に「兄妹とおぼしなせ。はかなき世の物語なども聞こえて、なぐさめむ」と言った中將は、まさに薫である。帚木の筆法だ。浮舟が中將に返歌しなかった、という事実は重い。「すべて朽木などのやうにて、人に捨てられてやみなむ」という浮舟の決意は、大君、あるいはもっと空蟬である。源氏物語は空蟬で始まり空蟬で終わるということか。

【0108】出家後の浮舟はふっさきれている。気分もよくなり、尼君と囲碁などもし、「行ひもいとよくして、法華経はさらなり、異法文なども、いと多く読みたまふ」。新生浮舟の誕生であろう。

【0109】新春の風景(242~4)。浮舟は匂宮のことを「心憂しと思ひ果て」ている。が、一年前のことは今や懐かしい思い出と化している。手習歌のなかに、匂宮との思い出が詠みこまれている。これで、匂宮は、中君のなかの薫のような存在となったと考えるべきか。

【0110】大尼君の孫「紀伊の守」の登場。帚木・空蟬巻の感覚である。「常陸の北の方」という言い方は、まさに空蟬であろう。このあたり、作者の意図はなかなかどうして露骨である。

- 【0111】この紀伊守が薫の従者で、一周忌をむかえる薫の宇治行きに同行している。現実がひたひたと浮舟に迫る。薫の動静がここで語られるのは、匂宮を出した流れからいって自然な展開というべきであろう。 【0109】
- 【0112】紀伊守の言葉によれば、浮舟を失った現在の薫の悲しみの深さもさることながら、大君の時は「いみじかりき。ほとほと出家もしたまひつばかりきかし」(246)という状態であった。これは、どう解釈すべきか。薫の心の中で、浮舟は、大君には及ばない。所詮形代という現実はどうしても越えられない。ならば、浮舟よ、お前は己の道を貫くしかないのだよ。ということか。朽木の選択は正解なのだという作者の宣告、浮舟への支援表明であろうか。
- 【0113】薫をはめる紀伊守に、妹尼が「光君と聞こえけむ故院の御ありさまには、え並びたまはじとおぼゆる」(247)と言う。妹尼は、明石中宮と同世代。ということは、光源氏と同世代は、大尼君である。大尼君の「いとこよなくひがみたまひにけれ」(244)という古きこそ、現在の光源氏に対する距離の表示ということになる。光源氏は遠くなりにけり、という印象づくりに大尼君の存在が一役かっているのである。
- 【0114】浮舟にしてみれば、出家の後、薫が自分のことを忘れていないという事実を確認し、薫と幸せに暮らせと願った母のことを思うけれども、「なかなかいふかひなきさまを見え聞こえたてまつらむは、なほいとつつましくぞありける」(247～8)と考えている。この文脈からみると、浮舟に出家したことに関する後悔が全くないとは言い切れない。雨夜品定めに、軽率に出家して後悔する女の話があった。あの時、なまうかびでは仏もいぎたなく思うだろうと作者は解説していた。その女に浮舟がなるかどうか。恐らくならぬだろう、という展開が予想される。
- 【0115】浮舟の一周忌のお布施の装束を浮舟の周りの者たちが裁縫し、「御前にはかかるをこそたてまつらすべけれ」(248)と言わせる。こういう新派みたいな構成は、作者の得意とするところである。
- 【0116】薫は、浮舟の兄弟の面倒を約束どおりみている。ここで「童なるが、中にきよげなるをば、近く使ひ馴らさむ、とぞおぼしたりける」とあるのが、次の巻の小君のことであろう。
- 【0117】薫は中宮に宇治のことを語っている。「ことさら道心を起こすべく造りおきたりける、聖の住処」(250)。光源氏の晩年の思いに重ね合わせようということか。
- 【0118】中宮が、浮舟情報を直接言わず、小宰相に依頼したのは、匂宮への配慮、母の愛である。
- 【0119】小宰相から事情を聞いた薫は、非常に慎重である。もし匂宮が知っていることなら「さらに、やがて亡せにしものと思ひなしてやみなむ」(253)「わがも

のに取り返し見むの心はまたつかはじ」(254) と思っている。浮舟に対する彼の愛情の程度を示唆する条文である。 【0112】。

【0120】小宰相を前にした時の薫の思いは本音であろう。しかし、中宮の前に出て、浮舟のことを語った時から、薫の行為は、建前のもとなる。そういうことを作者は、小宰相を介する設定にこめたものと思われる。

【0121】中宮から、匂宮がこの件については全く知らぬことを確認したうえで、薫が動く。浮舟の弟「童」をつれて、横川に行き僧都にまず会おうというのである。道中、薫は思う。「その人と見つけながら、あやしきさまに、容貌ことなる人のなかにて、憂きことを聞きつけたらむこそいみじかるべけれ」(256)。「憂きこと」とは何か。あれから一年たっている。彼女の身の上に出家しなければならない事情が起こって出家したのではないか。読者の脳裏に中将の影が走り、読者は薫の勘の鋭さに舌を巻くことになるか。あるいは、こんなことを思う薫の下衆さに辟易とするか。はたしてどちらか。

(注) 源氏物語本文は、石田穰二・清水好子校注『新潮日本古典集成 源氏物語 八』に拠っている。本文括弧内数字は、その所在を示したものである。

